# A description...

# リサイクル・ルー

〜資源管理を考える　人形劇＆劇〜

「アディサ」子供

「お母さん」母親

「フローラおばさん」ママニワトリ

「ジュニア」ひよこ

「ルーおじさん」リサイクルをするニワトリ

「カラー」プラスチックの襟を付けたカラス

「ガズル」犬

「バッファー」雄の水牛

「バッフィー」メスの水牛

1. アディサの家

アディサ 「あれ？　どこだろ？　おかしいなぁー。この辺りにあったはずなのに...市場に行く前は、確かここに…母さぁん！？　」

お母さん 「何？どうしたの？　」　（舞台袖から出てくる）

アディサ 「母さん、ここにあった手作りの鳥の巣、知らない？
ここにあったはずなん…

お母さん 「ああ、あの　あき缶の切れ端とかビニール袋がこうつなげてあったもののこと？」

アディサ 「そうそう、それ！　赤くて、陽の光に当てるとね、こうキラキラ光って…」

お母さん 「ああ、ごめんなさいねアディサ、お母さん、ゴミと間違えて捨てたかもしれないわ」

アディサ 「ゴミ？！　今どこにあるの？」

お母さん 「もうゴミは出しちゃったし、今朝のうちに回収されてしまったと思うから、お母さんにもわからないわ」

アディサ 「捨てられたゴミってどこに行くんだろう？　村のあちこちで散らかっているのを時々見るけど…うーん。どうやって見つけよう…。」

 「あ　そうだ！　 近頃はあんまり人間と話さなくなったけど、村のことをよく知っている動物たちなら何か知っているかもしれない。　まずはニワトリのフローラおばさんに聞いてみよう」

 （アディサは家の庭にある囲いの中に入ると、フローラとジュニアがゴミの山のてっぺんで何かをついばんでいる）

アディサ 「コケコッコー、こんにちは。」

フローラ 「コケコッコー、こんにちはアディサ。今日はどうしたの？」

アディサ 「フローラおばさん。あのね、実はとても大切なものを探しているんだ、それはね…」

ジュニア （悲しそうに鳴きながら倒れこみ、くちばしをこする）

アディサ （ジュニアに近寄ろうとする）

フローラ 「ああ、まただわ」

アディサ 「どういう意味？」

フローラ 「 私たちはね、生きている虫や、大地からの栄養をとっているの。食べ物よ。でもね、それが　この硬くて変なものの山の下に埋もれてしまって、つついてもつついても見つからない。私たち本当に困っているの。ジュニアもね、硬いものを一生懸命つついて食べ物を探しているうちに、くちばしを痛めてしまったのよ。」

アディサ 「え、これのこと？　危ないものじゃないよ？　これはね…(ゴミの山からペットボトルを拾い上げる)　ペットボトルって言うんだよ。私/僕もカバンに入れていつも持ち歩いてるよ（カバンを叩きながら）家への帰り道で喉が渇いたときのために…」

 （くぐもった鳴き声—　ゴゲゴゴー）

アディサ 「あれは何？」

（ルーおじさんがゴミの中に半分埋まってしまっていて、脱出しようともがいて出ている羽をバタバタさせている）

アディサ 「ひどい！　大丈夫ですか？　一体どうしたんです？」

ルーおじさん ゴゲゴゴー

フローラ 「ルーおじさんは、声は出るけどはっきりしゃべられないって言ってるのよ。私はずっと一緒にいるから、なんとかわかるけどね。何年か前にね、食べ物をさがしていたら、その…ペットボトルっていうの？　でくちばしを強く打ってね。その時の怪我が原因で、喋ったり、食べたり飲んだり、何をするときでもルーおじさんの口はすごく痛むのよ。ほら、くちばしが欠けているでしょう。それでもルーおじさんは一生懸命私たちのために食べ物を探してくれているの。それから、なくしてしまったくちばしの破片も探しているのよね。」

ルーおじさん ゴゲゴゴー

アディサ 「ひどい、ひどすぎる。私/僕に何かできることはないですか？　」

ルーおじさん ゴゲゴゴー

フローラ 「ルーおじさんが、アディサはきっと私たちのことを助けてくれるだろうって。それよりも、アディサも何か困ったことがあってここにきたんじゃないのか？って聞いているわ。」

アディサ 「実は、ビニール袋と缶の切れ端で作った鳥の巣を探しているんだけど…気にしないで。」

ルーおじさん ゴゲゴゴー

フローラ 「ルーおじさんが村の向こうの方で見たって。連れてってあげるって言ってるわよ」

アディサ 「いいんです。そんなに大事なものじゃないから。それより…　」

フローラ 「いや、おじさんは是非って言ってるわよ」

アディサ 「本当ですか…じゃあ、お願いします。」

フローラ 「じゃあ、羽をしっかり握って、ほら。」（フローラとアディサが片方ずつルーおじさんの翼を引っ張って、やっとの事でルーおじさんがゴミの山から抜け出す）

1. 村

 （フローラおばさん、ジュニア、ルーおじさんとアディサが村の中をゆっくりゆっくり歩いているがふと足を止める。目の前に真っ黒な牛が石の上に座り込んで悲しそうにしている。その首には大きな白いネックレスのようなものが付いている。）

ルーおじさん （アディサに何かをつぶやく）

カラー （首を絞められているような声で、ゼーゼー言いながら）ルーおじさん、聞こえてるぜ。また人間なんかに俺のことを話してるんだろ。「なんて気の毒なカラー。食べ物を探していて見つけた、白いネックレスをつけてみようなんてバカなことをするもんだから、あんな風に喉が締め付けられて、いつもひとりぼっちなんだ」ってさ。人間なんかに話したって無駄さ。何もしてくれるわけがないんだ。

アディサ （緊張しながら）あの、カラーさん、私/僕に何かできることはありませんか？

フローラ アディサ、やめておきなさい。私たちもいろいろ試してみたけど、どうしようもないことなの。人間のあなたが何をしてもカラーを怒らせるだけよ。

カラー この厄介なネックレスを外せるとでもいうのか？これはな、世界の何よりも頑丈厄介な素材でできてるんだぞ。

アディサ カラーさん、それはプラスチックっていうものでできてるんです。便利なものなんですよ。それはものを入れたりするバケツの縁の部分だと思います。それが首にはまって、きっと抜けなくなっちゃったんですね。

カラー ああ、そうさ。罠みたいにはまっちまった。プラスチックってのはお前らには便利なものかもしれないが、俺たちにはとんでもない厄介もんだ。まったく人間は地球を自分たちのものだと思ってやがるんだ。自分勝手でかなわんよ。

アディサ プラスチックは安いし、軽いし、頑丈で壊れにくいから人気があって、最近はいろんなものがプラスチックで作られているんです。

カラー そうさ、壊れにくいのさ。だからこの通り、話すことも難しくなるぐらいに、俺はずっと首を絞め続けられているんだ。

アディサ ちょっと見せてください。私/僕、前に一度妹の指にはまって抜けなくなった指輪を外したことがあるんです。だから…（カラーに近づく）

カラー やめろ！

ルーおじさん ゴゲゴゴー

フローラ カラー、アディサはいい子よ。だからルーおじさんだってあなたのことを話したの。任せてみなさいよ。

カラー 信用できないね

アディサ 信用してもらえなくても構いません。でも、一度だけ試させてください。あなたを助けたいんです。（静かにカラーに近づく。フローラ、ルーおじさん、ジュニアも静かにカラーの周理を囲む。）

 一度だけ。怖がらないで。大丈夫だから。

ルーおじさん （カラーに向かって）ゴゲゴゴー

 （四人がカラーの周りによる。客席に背を向けてカラーを隠す）

アディサ じゃあ行くよ！１、２、３！！

 （安堵の声、喜びの声をみんなで上げながら、大喜びでカラーの首についていたプラスチックを掲げて観客に見せる）

 （一同静まる）

カラー カアー！（鳴き声をあげる）声が出るぞ！

アディサ 何の音？

カラー （大きく、太い声で）カアー！　歌も歌える！

アディサ （笑いながら）そうだね、すごい声だ！

カラー （深呼吸をして）息もできる！

アディサ よかった！

カラー （態度が変わる。恥ずかしそうに、咳払いをして、でも大声で）あ、あの…助けてくれてありがとうな…あんな態度とって悪かったよ。あんなものを喉に引っかけたままでよ、イライラしちまって。何かお礼はできねえかな。

フローラ そんな大声で話さなくても聞こえているわよ！

カラー しょうがねえだろ、声が戻って嬉しいんだからよ！やっとの事で普通のカラスに戻れたんだぜ、早く仲間たちにも見せに行かなきゃな。

アディサ お礼だなんて、そんなこといいですから。

カラー 本当にいいやつなんだな、お前。

ルーおじさん ゴゲゴゴー（大きな声で）

フローラ ルーおじさんが、宝物は？って言ってるわよ

カラー 宝物？

アディサ いや、そんな特別なものじゃなくて、えっと、手作りの鳥の巣をね、探してたんだ。赤くて、キラキラしてて…もし見かけていたらと思って…聞いて回っていたんだけど。

カラー 赤くて、キラキラした　鳥の巣…待てよ、あ！見かけたぞ！

アディサ 本当に！？

フローラ 本当に！？(疑った様子で)

カラー 本当だよ、確かに見たよ。あの川沿いでさ

アディサ そんなぁ（ショックを受けて、悲しそうに）

アディサ以外全員 アディサ？

アディサ だって、あの川にはワニや恐ろしいものがたくさんいるんでしょ。危ないから絶対に近くにいっちゃいけないって言われてるんだ。川を見ることもダメだって。だからもうあの鳥の巣を見つけることはできないと思って…。

フローラ ちょっと待って、アディサ。あの川にはもうワニなんていないわよ。

カラー そうさアディサ、ゴミだらけでもうあの川には何も住めないぞ。ワニも魚も人間がゴミを捨て始めてからすっかり死に絶えちまった。 カァ〜（悲しそうな鳴き声）

アディサ そうなの？　あの川はワニや魚たちも住めないぐらいにゴミだらけでものすごく汚れてるってことなの？　じゃあ、もしあの鳥の巣がそこにあるとしたら見つけるのはやっぱり無理だよね…。

ルーおじさん （ものすごい早口で）「ゴゲゴゴーゴゲゴゴー」

フローラ ルーおじさん、落ち着いて、そんな早口じゃ何言ってるかわかんないわよ。

 （ルーおじさんがステージからはけながら、残りの全員を手招いて続くように指示する）

フローラ ルーおじさん、どこに行くのよ！　（ルーおじさんを追いかける。ジュニアも慌ててヨタヨタついていく）

カラー ルーおじさんはきっと川に向かってるぞ、アディサ、お前をどうしても連れて行きたいみたいだ。行くぞ！　（走り始めてついてこないアディサに気がつき止まる）

 おい、ルーおじさんを一人で行かせるつもりか！　お前のことを呼んでるぞ！　（ルーおじさんの大きな鳴き声がバックステージから聞こえて来る）

アディサ あの川には絶対にいっちゃいけないって母さんが。僕/私は母さんと約束してるから…。見ちゃいけない、近づいちゃいけない川なんだって。

カラー じゃあ、お前は友達を一人でそんな場所に行かせるんだな？

アディサ それでも僕/私はいけない…

カラー お前はまだ本気で川が危ないと思ってるのか？ルーおじさんはそこでお前の鳥の巣を探そうとしてるんだぞ！

アディサ ううん、もうワニはいないんだよね？　気をつけて行けばいいかな、川が近くなったら目をつぶって、母さんが言ってた「見ちゃいけないもの」を見ないようにして…ルーおじさんが僕/私のために行ってくれているんだから…

 (全員が舞台からはける)

1. 川辺

 （アディサ、ルーおじさん、カラー、フローラとジュニアがゴミに埋もれた砂地の川沿いを歩いている。 川は舞台上には設定していないが川の水の流れる音を流す。

フローラ なんだかんだ言ってたけど、ここに危険なものがあるようには私には見えないけど。

カラー ていうより、汚いよな。見ろよ、あんなにいろんなものが浮かんでるぜ、それに川沿いもゴミだらけじゃねえか。ウェェ。（プラスチックボトルの話を拾い上げ、振って投げすてる）

アディサ なんだか寂しいっていうか…何かがおかしい感じ。

フローラ で、ルーおじさん、なぜ私たちをここに連れてきたの？

 （汚れた犬のガズルが息を切らし、ヨロヨロしながらステージの左から登場。何かを言おうとして動いたところで倒れこむ）

全員 あっ！（大変！大丈夫ですか！などとそれぞれに驚きと心配の声を上げながら、犬が観客から見える形で半円に囲む。）

フローラ アディサ、あなたいつもペットボトルの水を持ち歩いているって言ってたわよね、この子に早く水を！

 （アディサが水の入ったペットボトルを取り出し、しゃがみこんで水をガズルにかける。するとガズルは咳をしながら起き上がって、口を指差す）

フローラ 喉が渇いているんだね！

 （アディサが水を飲ませようと動くが、ガズルがそのペットボトルを奪い取ってあっという間に飲み干す。その後数秒の静寂）

アディサ 大丈夫ですか？

 （ガズルがボトルの中の残った少しの水を顔の上に振り掛けようとボトルを振り、水が周りのみんなにもかかる）

ガズル 大丈夫。ただ、喉がものすごく渇いているんだ

カラー 喉が渇いてるって、何言ってんだよ。水なんていくらでも川にあるじゃないか。ここから１０メートルも離れてないぜ。そのボトルよこせよ、もう一杯汲んできてやらあ。（川に向かうため、舞台からはける）

ガズル 行っちゃだめだ！その水はひどく汚染されているんだ！川の水を飲んだ動物たちは皆、ひどい病気になって苦しんでる。すぐに戻って！

アディサ 汚れてる？　本当に？

ガズル 間違いない。何かとてつもなく恐ろしいものがこの川には染みついてる。それは人間たちが作ったものさ。自然にそうなったんじゃないんだ。

アディサ あなた/君の名前を聞いてもいい？

ガズル ガズルだよ

アディサ ガズル、どうして 川が汚染されてるってわかったの？

ガズル 仲間の沢山の犬たちがこの川のせいで病気になってる。それにね、この川の水はとっても苦いんだ。今の僕たちにはこの水を飲んで病気になって死ぬか、水が飲めなくて渇きに苦しみながら死ぬか、どちらかしかないのさ。

アディサ 何てこと...(言葉に詰まる)

ガズル そういうことなのさ。

アディサ でも、きっと何かいい解決方法があるはず！

ガズル そんなのあるはずないよ。

ルーおじさん （怒って）ゴゲゴゴー

フローラ ルーおじさんはそんなことないって思ってるみたいね。

 （カラーがイライラしながら舞台上にバケツを持って戻ってくる。）

カラー アディサ、ルーおじさん、見ろよこの魚たちをよ！横向いたままピクリとも動かないぜ…

ガズル （カラーが言い終わるやいなや続けて）それで口にカラフルなかけらがいっぱい詰まってるんでしょ。…そうだよ、病気なんだ。横に向いてるのはね、川の汚染で 酸素がなくなってしまって、水の中では息ができなくなってしまったからなんだよ。もうどうしようも無いから浅瀬まで行って、体を横に向けてエラを空に向けて何とか空気を吸って生きてるってわけさ。

アディサ カラフルなかけらって一体何？

ガズル ああ、それはいろんな色のプラスチックのかけらが体に入っちゃってるんだ。

 （一同沈黙）

アディサ （目に涙をためて震えながら）なんてこと…（疲れた様子で）いったい私/僕たち人間は何してるんだろう…(ふらふらっと皆から離れていき、泣き始める)

 （皆アディサの方を向いているが、どうしていいかわからない様子でオロオロする。ルーおじさんがアディサの方に歩いていく）

ルーおじさん （優しく）「ゴゲゴゴーゴゴー」

フローラ ルーおじさんはね、あなたを悲しませるためにこれを見せたかったんじゃない、でもこの状態を見て、知って欲しかったって。アディサならきっと助けようとしてくれる、きっとこの状態を変えられるって思ったからだって。

アディサ （顔を上げて）ルーおじさん、本当に？私/僕に変えられると思う？

ルーおじさん （励ますように）ゴゲゴゴー

アディサ わかった、村に行こう。きっと村から変えなきゃいけないと思う。皆で村に帰ろう。

 （全員が舞台からはける）

1. 村

 （村の入り口に着く）

フローラ さあ、ついたわよ。で、これからどうするつもり？

 (ステージ上の役者たち全員が明るい音楽に合わせて体でリズムをとったり、足踏みをしたりしている)

ガズル いったい何があったんだろう

ルーおじさん ゴゲゴゴー（嬉しそうな様子で笑いをこらえながら）

フローラ ルーおじさん、どうしたの？

 （二頭の水牛が工事用のベストを着て、二つのゴミ袋をずるずると引きずりながらステージの反対側から出てくる。）

バッファー すみませんねー、道開けてもらえんかいなー。

バッフィー 道開けてくださー、あ、あら、ルーおじさん。お元気？

ルーおじさん 「ゴゲゴゴーゴゲゴゴー」

バッファー そうなんだよなあ、おお、それでもさ、久しぶりにあえてよかった。さーて俺らはそろそろ行かにゃならんでな。

アディサ わあ、ちょっと待って！　どこに行くの？　どこから来たの？　いったい何を運んでるの？

バッファー ルーおじさんよ、随分威勢のいいお嬢ちゃん/お坊ちゃん連れてるじゃないの。おお、お嬢ちゃん/お坊ちゃんよ、俺たちは水牛ゴミ回収業者さ。田舎を回ってゴミを集めて回ってるんだがね。まったく割に合わない仕事だよ。

バッフィー 私たちはね、リサイクルするものを運んでいるのさ。おかしなものだよ、同じものなのにさ、人間が使ってる間は便利なものなのに、自然の中に捨てられた途端にどうしようもない困りものになっちゃうんだからさ。でもね、リサイクルすればまた使えるのさ。あのカラフルなもん、なんだっけな、そうそう、プラスチックってやつ。あれは今回も随分あるねえ。

カラー ああ！

バッファー プラスチックだけじゃないぞ、紙もな、殆どのものがリサイクルできるんだからなあ。

アディサ リサイクル…。　それって要らなくなったものを綺麗にしたり、形を変えたりして、また使えるものを新しく作るってことでしょ。それって、つまりあの　私/僕が鳥の巣を作ったのと同じことだよね、ルーおじさん。だって、みんなが要らないって思ってるものから作ったんだもんね。リサイクルってことでしょ？

ルーおじさん ゴゲゴゴー

アディサ じゃあ、あなた方は動物たちを苦しめているあのゴミをきれいにするお手伝いをしてるってことでしょう。それで、それをまた人が使えるようにできるところ、リサイクルできるところに運んでくれてるんでしょ。すごい！

バッフィー まあ、そんなところさ。でもね、現実はものが多すぎて、どこにいってもゴミだらけ、運んでも運んでもなかなかなくならないのさ。私たちのスピードじゃあ、とても追いつかないんだよ。この村じゃ、ゴミを動物たちに任せっきりさ。誰かがなんとかしてくれると思ってるからね。

アディサ どうすればいいでしょうか。

 （アディサの母親が入ってくる）

お母さん アディサ！　アディサ！　ここにいたのね。ずっと探してたのよ。一体どこにいってたの！

アディサ お母さん、ごめんなさい。鳥の巣を探しに行ってて、それでね、大切なことを教えてもらってたの。

お母さん 何言ってるの、あなたは。わけのわからないことを言っていないで。いったいどこに行っていたの？

アディサ 川に

お母さん アディサ！　川の近くに行ってはいけないと言ったでしょう！なぜ言うことを聞かないの！

アディサ わかってるよ、お母さん。でもね、川が危ないのはワニがいるからなの？　それとも汚染されてるから？

お母さん （口ごもって）えっとね、そうね。川が危ないのは今は自然が原因じゃないわね。あなたが正しいわ。そう、ワニじゃなくてみんながゴミを川に捨てた結果よ。バッフィーとバッファーがそのゴミを拾ってリサイクルをしてくれているけど、それだけでは間に合わない量のゴミをね。

アディサ お母さん、それは私/僕たちもなんとかしなきゃ。どうしたらいいか、バッファーとバッフィーに教えてもらおうよ。

バッファー エヘン、さて。それはゴミを一つの決めた場所に集めることだな。

バッフィー そうね、一つの場所に集めるのはいいことだね。そうすれば村じゅうをあっちに行ったりこっちに行ったりしながら一つ一つ拾わなくてもいいからね。今はそれだけで時間を食わされちまう。それにずっと下向いてゴミを拾い歩いていると首も疲れてたまらないんだよ。もし一つの場所にまとめておいてくれたら、一度に全部のゴミを集められるし、きっと他の村に回る時間もできるよ。いいねえ、それはとってもいい考えだ！

バッフィー それに、村中にゴミが散らかることもなくなるし、何より川にゴミが入ることもなくなるだろうね。

バッファー もしお嬢ちゃん/お坊ちゃんが本気で皆のために何かをしたいのなら、その集まったゴミを種類ごとに分けるんだ。プラスチック、紙、金属ってね。そうしたらそれを俺たちが細かく砕いて、また使えるようにする。

バッフィー そりゃあいい！　要らなくなったものを新しく生まれ変わらせることができるんだよ！　そうしたらその分、限られた自然の資源を無駄にしなくても済むじゃないか。

アディサ わー、すごい！　それにそれだけで動物たちや友達たちを救うことができるってことでしょ！

バッファー ああ、でも手間はかかるぞ。でもそうだ、それだけで、だ。

アディサ お母さん、聞いたでしょ。ほんの少し今のやり方を変えるだけでいいんだよ！こんなに簡単なことで、皆のことも救えるんだよ！

ルーおじさん ゴゲゴゴー　（言った通りだろう、という感じで嬉しそうに呟く）

フローラ そうね、ルーおじさんは正しかった。きっとルーおじさんはいろんなことがわかってた。プラスチックのせいで話せなくなってしまったけど、ずっとこれをアディサたち人間や私たちに伝えたかったのね。

ルーおじさん （大きな声で）ゴゲゴゴー！

お母さん そういうことだったのね。 ルーおじさんの鳴き声は毎朝聞こえてたけれど、なぜここのところは悲しそうに鳴いてばかりいるのかしらって思ってた。まさか怪我をしてしゃべれなくなっていただなんて。リサイクルしなさいって言いたかったのね。ずっと気がつかなかった。

ルーおじさん （試合に勝ったボクサーのように両手を上げて喜び、飛び上がったりしながら）ゴゲゴゴー！！

アディサ ねえ、これって最高だよ、だって大して難しいことをしなくてもいいんだもの。種類ごとにゴミを分けて、水牛さんたちにリサイクルする場所に運んでもらうだけでしょ。

フローラ 大きな地球のための、最初の小さな一歩ね。ねえ、アディサ、今日あなたがした、たくさんの小さな一歩を思い出してごらんなさいよ。私たちに食べ物をくれた。それからカラーの首のプラスチックを外してあげた。ガズルに水をあげた。そしてルーおじさんの想いに耳を傾けて、おじさんがずっとみんなに伝えたかったことを見つけた。全て小さな一歩だけど、とっても大事なことばかりだったと思うわ。

アディサ ルーおじさんのくちばしが治らないのだけが残念だよ。おじさんが話せたらいいのに。もっといろんなことを教えてもらいたいのに。

お母さん もしかしたら、私に何かできるかもしれないわ。

アディサ え、お母さん、ルーおじさんを助けてくれるの？

お母さん ええ、骨折や怪我の担当看護師をしたことがあるのよ。ちょっと怪我をしたくちばしを見せてみて。

 （お母さん、ルーおじさんのそばにしゃがみこんでくちばしを診る）

バッファー おいおい、お前さんのおかげで全てがうまくいきそうじゃないか。ありがとな、えーっと

アディサ アディサ。

バッフィー アディサ、ありがとうね。あんたみたいな人間がいてよかったよ。さあて、仕事に戻るとするかね。じゃあ、村のゴミを集める場所が決まったら知らせてちょうだい。

バッファー じゃあな。

水牛以外 じゃあ、また。またね、後で。（などとそれぞれに水牛たちを送り出す）

 （水牛たちが履ける。舞台の反対側、 水牛たちがやってきた方向にゴミを背負いながら戻っていく）

お母さん さて、これでもう大丈夫。（皆がルーおじさんの周りに立って、様子を見守っている）

フローラ どう？

アディサ ルーおじさん？

ガズル 喋れるようになった？

ルーおじさん ゴゲゴッココー

 （全員ため息をついて、ルーおじさんから残念そうに視線を外す。）

ルーおじさん 声が戻った！

 （全員が一度にルーおじさんに視線を戻し、手ををたたくなどして喜ぶ）

アディサ ルーおじさん！声が戻ったんだね！（ルーおじさんを抱きしめる）

ルーおじさん 戻ったな！　本当にありがとうよ。やっと鳴くだけではなくて、話せるようになって嬉しいよ。お母さんが言ったように、毎朝みんなにリサイクルすることを伝えたくて鳴いていたこともやっと通じてよかった。ゴミを村人たちがまとめて、さらに分別をするだけで、水牛たちのリサイクルがもっとうまくいくようになるだろう。このことをずっと伝えたかったんだがな。鳴き声だけではなかなか伝わらなくて参ったよ。

アディサ 本当に話せるようになってよかった。すっごく嬉しいよ。

ルーおじさん さて、じゃあお前さんの宝物を探しに行こうじゃないか。鳥の巣、まだ見つけてないだろう。

カラー （背後に何かを隠し持っている）えっと、エヘン。実はな、川で見つけて拾ったんだ。礼が言いたくてよ。これでも綺麗にしたつもりなんだけどよ。いろいろ俺たちのために今日はありがとうな、アディサ。

アディサ お礼を言うのはまだ早いよ。だってこれから色々やらなきゃいけないんだもの！

ルーおじさん そうだな、始まったばかりだ。いいか、一つ思い出して欲しいことがある。

フローラ ルーおじさん、もったいぶって 何なの？

ルーおじさん 新しいことを始めたばかりの時は、続けるのは簡単なことじゃないかもしれない。時にはうっかり忘れてしまうこともあるかもしれない。だから、私や仲間の鶏たちが毎日君たちに忘れないように伝えるからね。私たちの鳴き声を聞いた時にはその意味を思い出して欲しいんだ。 ゴミは決められた場所に捨てることをね。

お母さん そうね、決められた場所に捨てれば、再利用やリサイクルがしやすいものね。リサイクルできないものも一つの場所にまとめておけば、村だけじゃなく、川や森などの自然を汚すこともなくなるわ。わかりました。鶏さんたちの鳴き声が聞こえた時にはいつもそのことを思い出すようにします。

アディサ 自然が汚れなければ、動物たちも幸せに暮らせるね。それにさ、川が綺麗になったら、川に入って遊べるようになるよね！

ルーおじさん コケコッコー

アディサ ねえ、今から川の魚たちに伝えに行こうよ、みんなでリサイクルしたり、ゴミをまとめたりして、川の水を綺麗にするからねって。今にプラスチックがない、安全な川になるからって！

 （アディサに続き、みんなが川に向かって走り、舞台からはける。全員がいなくなったら幕が閉まる）